

S.C.WORKS 今週のスタディ！

【ヘッドライン】

- 1) 「ライフ、スーパー総菜のごみでバイオ発電乗り出す」
- 2) 「新生“コメダ珈琲店”本店きょう開業」
- 3) 「“オブジェ付きベンチ”に“排除アート”の批判 街中に増加は“許容できない社会”になったから？」

1) 「ライフ、スーパー総菜のごみでバイオ発電乗り出す」

大手スーパーのライフコーポレーションが、総菜やカットフルーツなどの調理時に出る食品廃棄物を活用したバイオガス発電事業に乗り出した。SDGs（持続可能な開発目標）の達成に向けて廃棄物を有効活用する取り組みで、小売業界では初めての試みという。

大阪市港区にある自社の食品工場の敷地内に9億円を投じて発電施設を建設し、今春に稼働を始めた。

キャベツの芯やパイナップルの皮などを細かく砕き、発酵させることで生じる可燃性のガスを燃料に発電する。

1年間に一般家庭約160世帯分の使用量に相当する約70万キロ・ワット時を発電でき、食品廃棄物を約4380トン減らせると試算している。電気は自社工場で使うほか、電力会社にも販売する。

ライフは関西と首都圏でスーパーを展開しており、近畿圏物流部の米谷淳二部長は「関東でもバイオガス発電に挑戦したい」と話している。

（2022/10/11 読売新聞オンライン）

ライフのような大手がこういった取り組みを始めたことにより、各社食品廃棄物問題への取り組みにも拍車がかかるのではないだろうか。最近では捨てるはずの野菜の皮を利用した商品が販売されたり自宅で作れる自作コンポストが話題になったりといわゆる「生ゴミ」の二次利用が消費者にも定着しつつある。工場単位で大規模に行うことももちろん大切だが、各店舗で使える超小型バイオガス発電機の普及など多方面での広がりにも期待したい。

2) 「新生“コメダ珈琲店”本店きょう開業」

コメダHDが運営する「コメダ珈琲店」の本店が建て替え工事が完了、7日に開業する。これまでの本店は1977年に開業したが老朽化のため8月末に営業を終え取り壊された。旧本店の敷地内に建てた新しい本店は、直営店では初めて電気自動車（EV）の充電器を設け屋根には太陽光発電パネルも置いた。環境に配慮した仕様で、今後の店舗作りの指針にしたい考えだ。

テーブルや内壁には、コメダが森林環境保全に取り組む三重県の「コメダの森」の間伐材を使用している。森林の植樹や間伐などの費用や作業を自治体から企業が請け負う「企業の森」プロジェクトに参加、2021年からおよそ28ヘクタールを管理している。コメダの森の間伐材を店舗に活用するのは初めてだという。

（2022/10/07 日経MJ）

コメダ珈琲のように一定のデザインイメージがある企業は、「〇〇といえばあそこ！」と消費者共通のアイコン的存在になることも多いだろう。その分新しくイメージを刷新する際はリスクも大きく、変わってしまったことによってイメージダウンにもなりかねない。店舗では目に見えてその企業の取り組みや姿勢を消費者に表現する場にもなるので、この新しい指針が今後の店舗においてどう影響していくのか注目していきたい。

3) 「“オブジェ付きベンチ”に「排除アート」の批判 街中に増加は“許容できない社会”になったから？」

「これは排除アートですよね」。先日、Twitterであるベンチのデザインが一部で話題になった。

「排除アート」とは、駅や公園などの公共の場所で、ホームレスが寝転がれないようにしたり、用途以外の使い方ができないようデザインされたものに対して使われる言葉。今回話題になったのは、11月1日に愛知県で開業するジブリパークに合わせて愛・地球博記念公園内に設置された、オブジェがあしらわれたベンチだ。愛知県によると、公園は19時に閉まるため寝泊りはできず、その目的も記念写真を撮ったり作品の世界に触れてもらうため、それ以外の意図はないとしている。

近年、公共のスペースに置かれたベンチやオブジェなどのデザインが「排除アートだ」と指摘されるケースが増えている。東京では、渋谷に設置されたオブジェやミヤシタパークのベンチ、新宿駅の地下通路に設置されたオブジェなどが、ホームレスの排除を意図したものでとは批判を受けた。

前述のオブジェ付きベンチについて、公園のベンチのデザインも手掛ける株式会社グランドレベル社長の田中元子氏は「これに関しては別にいいと思っている。“楽しませよう”と思って作られたことがありありとわかることと、元々ベンチがあったところに増設されたもの。私は彫刻だと思って見ている」との見方を示す。

田中氏によると、排除アートの増加は「誰かが意地悪をしたり、人を排除してしめしめとほくそ笑んでいるわけでは決してない。公共空間や公共物の使い方が荒々しいから、管理するほうが困ってしまって『使えないように、近づかないように』と、リスクを避けていった結果だ」という。

「個人的には、公共空間や公園など『公』の字がつく場所や物は、不特定多数の方に両手を広げてほしいという願いがある。そうでないと、私自身も含めて“ここには来ないで”“これは使わないで”と、街の中でなにか行動制限をされているように感じるからだ」と田中氏。

一方で、「そのベンチを誰が管理しているかということがある。管理者がお金も時間も手間もかけて、汚されたり壊れたりしたものを修復して、また戻すという作業をされている。その労力を無視し続けるわけにはいかないと思っている」との考えを示した。

田中氏は「ベンチが少なすぎるのが根本的に問題だ。ベンチが1基しかなければ、“あそこであいつが寝ていやがる”とムカッとくるのはわからなくもない。ホームレスの方々は居場所をすごく選ぶというか、できるだけ迷惑がかからないようにという方がすごく多い。そういった意味ではベンチが1000基あって、“誰かは寝ているし、私もここに座る”と誰にとっても使いやすい状況にまだ伸び代があると思っている。ホームレスの方も、家のある方も全員被害者だ。その被害を誰が作ったのかというと、誰かの悪意でできたものでは決してない。“清潔でいたい”“安全でいたい”“私にとっていいものでありたい”がせめぎ合った結果、自分の首を絞めているような構図になっている」と指摘した。

その上で、「愛知のベンチの話に戻ると、“かわいい物と一緒に写真を撮って楽しんでください”という、誰かに喜びをプレゼントする気持ちを排除するの？ということだ。線引きが難しく、誰もが納得いく形はない。いろんな人がいて、自分が100%納得いかなくてもうまくやっけていけるという状況を作らないと、根本的に解決しないだろうと考えている」と述べた。

(2022/10/16 ABEMA TIMES)

製作側がいろいろアイデアを練って楽しませようと試みたものにこうしたクレームがつくとは驚いた。物事にはいろいろな見方があると思うが、公共のものや不特定多数の人が利用するものを作る場合はあらゆる面を配慮しなければいけないことを考えられる。この件に関してはSNSで排除だと騒ぎ立てるのではなく排除される人がいない世の中にする根本的な対策が必要だと思うが、問題提起として参考になった。